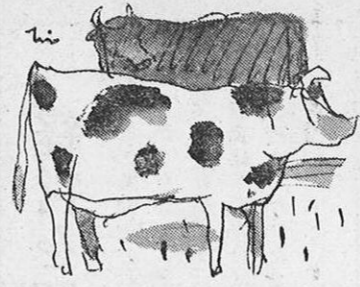


水田地帯で酪農をやりたい

問 私は宇土郡の一農家の長男ですが、水田約一五〇アールと畑二〇アールを経営しています。今までは米麦一本やりで作ってきましたが、これからは米も余つてくるという話も聞きまし、不安を感じています。そこで部落の友人達と話しあつて、酪農でもはじめてみたらと相談していますがどんなものでしょうか。そのやり方も教えて下さい。

(宇土郡不知火町 一青年)

答 米も六年続きの豊作で、総体的にみると、需要と供給のバランスがとれてきたキザンが目に見えてきました。さらに稲作技術の向上で、一〇年後には今より一〇%以上も反収が高くなる見とおしです。



だから、このまゝ米を作つていけば国全体としてみた場合は余ることも予想されず。値段の点では、現在は「食管法」などによつて安定していますが、長期的にみた場合には到達したいものです。ここで粗飼料生産が問題になります。飼料は少なくとも七割以上は自給しなければ好い収益にはなりません。とすると生草換算で年間一頭当り二十五トン内外必要です。

え合せ、米作と他作物との相対的有利性を十分検討した上で、いずれにするか、選択する必要があると思います。あなたの場合、部落の人達と話し合つて、酪農を導入したいとおつしやるのは、方向としては結構です。地方増進にも役立つと思いますし、粗飼料は水田地帯ですからたやすくつくれますし、酪農は水田地帯の新しい方向のひとつとして、いまクローズアップしてきました。

さて、酪農の規模は、なるべく早く搾乳牛三頭の線には到達したいものです。飼料は少なくとも七割以上は自給しなければ好い収益にはなりません。とすると生草換算で年間一頭当り二十五トン内外必要です。

もちろん稲ワラもこの中に含めて計算してよいわけですが、これだけ多量の粗飼料を年間切れ目なく使用できるように作るためには、あなたの場合、畑を全部飼料作付けにするほかに、田畑輪換や、

水稲の早期、普通、晩期各作型を利用した飼料作付けも考えねばなりません。それには、水稲作付け以外の期間は、水田が畑状態になる必要があります。だから、各農家が各戸バラバラに計画してもうまくいけません。それぞれの水稲の作型は、その地域では集団的に同じものにする必要があります。

そこでは非おす、めすることは、水路の共同管理と共同利用ということになります。水路ごとに一つの作型にまとめる……この水系では早期、こちらは中期……と

し、前後を飼料作にする。或は全然水稲を作らず畑にしてしまふ。又水路全体共同で水のかけ引きをやると、間断中干し等も十分にでき、米の収量や品質向上にも明らかに好結果を及ぼします。このように、水路の共同管理が協業化の第一歩ともいえます。

なお、あなたの部落に最も適した方法で「酪農」を導入することがたいせつです。まず改良普及員や役場、農協等に直接ご相談下さい。

(農業改良課)

果樹ははたして有望か?

問 私達のような畑作農家では、収入が少なく経営が楽ではありませんので、部落の同志と、どうして立て直すかよいか討論していますが、まずそれには、県でも力を入れて果樹をとり入れてはどうだろうか、ということになりました。なにぶん、永年作物ですから、その将来性にも不安がありますので、県の考え方や長期の見通し、導入の方法などをお示し下さい。

(天草郡松島町 F生)

答 農業経営の中に果樹をとり入れて収入を増すということは、良い着眼点です。だが、そのためには、立地条件、加工方法、果実の販売方法や経路などを十分研究して、生産計画をたてねばなりません。

本県にはいろいろな果樹がとり入れられています。県ではそれぞれの果樹について、流通や加工面から考えて、売れ

ゆきの良い品種系統を、集団的にとり入れ、販売に有利な集団産地を育成しようと考えています。

そして、指導の重点は生産を共同化してコストを引き下げると同時に、規格や品質の揃つたものを量産して、計画出荷と共同販売を進め、特に大消費地向けの出荷は市場を定めるようにし、輸出については、三角港からの直接貿易で数量を

ふやすなど、いろいろと考えています。果実の加工業をみると、これまで四工場にすぎなかつたものが、三十五年には十四工場に増加しましたが、さらに生産者団体による加工場の建設が現在計画されています。

加工原料としては、普通温州みかんが主体で、桃、葡萄、夏柑はいまのところ少量です。

いずれにしても、生産から販売にいたる共同化の動きが、今後の果樹農業を大きく変革させ発展させるものと予想されますので、既成産地であると新興産地であることを問わず、ここで一ふんばりし

て、共同化に思いきつて前進していた、きたいと思つています。

このたび「果樹農業振興特別措置法」によつて、国では長期生産計画を策定し、知事はその計画にのつとつた市町村計画を認定し、資金対策や種苗対策を考慮することとなりました。

また、新植農家は市町村計画に基づいて、資金の融資もつけられることになりました。また、県では、果樹技術の修得に必要な農家子弟の研修施設も拡充強化し、これからの果樹生産の担い手の養成に遺憾のないよう準備しています。

(農産課)

畑地帯であか牛の肥育を

問 私の地方は畑作を主とする地帯で、家は夫婦のほか祖母、長男計四人の労働力で、畑九〇アール、水田二〇アールを経営している小さな農家です。経営も今までの米麦(大麦・燕麦)や甘藷ばかりでは収益もあがらず、今後どうしたらよいかと思案投げ首の状態です。そこで、あか牛の肥育をやつてみたいと思ひますがいかがでしょうか。現在家畜は馬を一頭もつています。聞くところによると、知事さんは畜産に力を入れるといわれていますが、将来性はどんなものでしょうか、よろしくご教示下さい。

(飽託郡託麻村 一農民)

答 最近のように食肉の需要がふえてきますと、和牛は肉牛としてますます重要になってきます。全国的にみますと、うまれる仔の数よりも、と殺して

食べる頭数が多いので、現在肉牛が不足しています。これからも、国民の生活が向上すればするほど、肉の消費はふえていきますから、将来性は大きいあるとい

自慢はあか牛の共同肥育

芦北町大野部落

▼「この共同肥育グループの皆さんはあか牛の肥育にかけちやあ、モウ立派な技術員ですよ。」と、大野農協畜産専門技術員の草野さんは自慢する。

▼自慢するだけあつて、ここ芦北郡芦北町大野部落でやつていいるあか牛の共同肥育事業は立派なもの。サイロは各戸に二基あつてもある。カッターやチャップパーなどの機械もすべて共同使用だ。

▼この部落は早期栽培に切りかえるのも早かつた。早期の跡作には飼料をどしどし植えてあか牛を飼ひ始めた。もうその頃から、農作業の共同化は始まつていたのだ。

▼あか牛も最初は二万七千円程度のもを購入してやつていたが、いまでは六万八千円ぐらゐのものを共同購入し、十万円以上に肥育して共同出荷している。

▼いま四十八名で約八十頭飼つているが、このグループの特徴は月一回の肥育指導だ。農協、畜連、共済組合、改良普及所等の指導員が、管理全般にわたつて個別指導をするが、各家庭に巡回するのはなく、共同つなぎ場に集合しての指導だから、時には討論会に早変わり。しかし、指導員の意見は卒直に受け入れている。これが成功の最も大きな力であろう。

▼「おかげで、ワシたちやあか牛ンこつにかけちやあ自信のぞけました。こんどは共同畜舎の検討はせにやなりました。」と、グループの人々はなかなか意気けんこうたるものがある。

